



愛隣幼稚園

園だより

21. 12月

アドベントの時に

2021 年もあとひと月になりました。幼稚園ではアドベント礼拝が始まり、子どもたちはページェント（生誕劇）の役決めをしたり（愛隣では子どもが自分のやりたい役を申告します。）、クリスマス礼拝に使うろうそく立てを作ったり、飾り作りも始めました。「ねーねー、クリスマスのピアノ弾いて？」いつもはピアノをふざけてバンバンと少々乱暴に弾く Y 君が、今日はぼろんぼろんと優しい音色を奏でながら先生にリクエスト。「あのね、Y ね、クリスマスの歌、好きなの。」先生も少し驚きました。意外な Y 君の姿です。その後、先生は子どもたちから質問攻めに遭ったようです。「ベツレヘムはどこ？」先生は子どもたちと一緒に、聖書の中にある地図にベツレヘムの文字を探しましたが見つかりません。きっと先生もドキドキしたはずです。（探した地図にはたまたまベツレヘムの地名がなかったようです。）さらに質問は続きます。「イエスさまのお母さんはマリアさんでしょ。じゃ、マリアさんのお母さんは？」「・・・せんせいもよくわからない。」きっと子どもたちからの質問攻めは、先生にとってまるで試験を受けているかのような時間だったに違いありません。私だってドキドキします。（ちなみにマリアさんのお母さんはアンナさんというのだそうですが、私はよく知りません。）愛隣幼稚園にはクリスチャンの先生たちもいますが、そうでない先生たちもいます。当然、クリスマスのことも、キリスト教のことも、知識としての量には大きな違いがあります。でも、私は知識の量が多くなければいけないとは思っていません。私たちも子どもたちと一緒に「これはいったいどういうことだろう？クリスマスは神様の子どもイエス様が私たちのためにお生まれになった日？」「クリスマス、おめでとう！って？」子どもたちが初めて、本当のクリスマスのお話を聴いて、驚いたり、不思議に思ったりしながらこの時を過ごすように、先生たちにも心動かしてこの時を共に歩んでほしいと願っています。

また、先週は with あいりんがホールでリース作りのイベントを開催。ここ数年、毎年このような企画をしてくれるのですが、実は、ここに至るまでの準備期間が本当に長いのです。ある年は、千日紅の種を蒔くところから始まり、四季折々の実りを探しては千葉大、花島公園周辺、青葉の森、泉自然公園などなど歩き回る歩き回る。そして猫の額ほどの愛隣の畑で、サツマイモの収穫が行われれば、その蔓をせっせと巻いてリースの土台作り。多くの人の手と、時間を費やしてその準備は行われています。そして先週、ホールにはそれはそれは豊かな宝の山が、所狭しと並べられていました。人の手と、人の時間が準備したその宝の山は、神様が愛おしんで創られた自然の造形物です。その美しさと形の不思議、集められた物たちが放つ温もり、言葉にならない何か……。リースを作らなくても、ただそこに居るだけで心が満たされていきます。先生たちに「ホール、見た？」と聞くと、「写真、撮っちゃいました！」二人の先生たちからはそんな返事。他の先生は「あっ、あとで見たいと思ってました。」間もなく職員室は空っぽに。先生たちはどんなことを感じたのでしょうか？あの日、ホールに集まった参加者の皆さんも、あの宝物を見てきっと様々なことを感じていたのではないのでしょうか。

『もしもわたしが、すべての子どもの成長を見守る善良な妖精に話しかける力をもっているとしたら、世界中の子どもに、生涯消えることのない「センス・オブ・ワンダー＝神秘さや不思議さに目を見はる感性」を授けてほしいとたのむでしょう。』レイチェル・カーソンが著書「センス・オブ・ワンダー」の中に書いています。アドベントの時、わたしたちが聴く“イエスさま誕生の知らせ”、目にし手にする“自然からいただく造形物”はどれも神様からのプレゼントです。この出来事に心動かされている子どもたちがいて、その子どもたちにドキドキしながら向き合う先生がいて、造形物の美しさに目を見張り、心満たされていく大人たちがいます。ここにも、私の事として起こったクリスマスの出来事があります。こんなふうにして、神様は私たちひとり一人の傍らに来てくださるのです。